

認知言語学

長谷部亜子

認知言語学分野における研究は、益々盛んになってきている。研究が深化するにつれ、認知言語学の成果を教育に活かす仕事や、認知言語学の基本的な考え方を相対化する仕事が見えてくるのは必然であろう。今回は、そうした流れに沿って、表現研究にも関わる二つの動向に注目したい。

まず、認知言語学の研究成果を、日本語教育分野において生かそうというものである。認知言語学の理論を用いた意味分析の結果に基づき、実証実験を行い、その成果を論じた松田文子氏・白石知代氏の研究論文「複合動詞『V-かける』の意味記述—L2学習者の『V1+V2ストラテジー』を活かすための試み—」が、2011年度に教育系の学会誌『日本語教育』150号に掲載されたことは象徴的である。ちなみにこの研究論文の意味記述に関する部分は、本学会誌に掲載された論文に基づいている。

この動向の、もうひとつの事例として、荒川洋平・今井新悟・森山新（編著）『日本語多義語学習辞典』（2011年11月～2012年春予定、アルク）を挙げる。これは、「多義語に関する認知言語学の理論を用いて（略）複雑な多義語の意味を『意味ネットワーク』として一まとめに記述する辞書」（p.3より一部抜粋）として編まれたものである。この辞典は、名詞121語、形容詞・副詞84語、動詞104語を収め、それぞれ『名詞編』『形容詞・副詞編』『動詞編』と題して出版、もしくは出版予

定である。また、辞典の目的として当然ではあるが、読んで理解することはもとより、運用面（表現すること）を意識した構成になっている。なお本辞典は、学習用辞典であるため、取り上げられた語義は網羅的ではなく選択的である。この語義選択については異なった意見があり得るかもしれない。

つぎに、もうひとつの動向の一例として、天野みどり『日本語構文の意味と類推拡張』（2011年10月、笠間書院）を挙げる。これは、著者の天野氏が「日本語学の立場から」（p.13）と述べているように、認知言語学の立場はとっていない。しかし、記述の用語としては、スキーマ、類推、拡張、写像、等々、認知言語学に馴染みの用語が用いられている。

天野氏は、「AガBヲV」という構文類型を取り上げ、今までの言語研究では逸脱の特徴をもつ表現として研究対象から外れてしまった一見不自然な表現も、この構文類型によるスキーマ形成が、類推を経てカテゴリー拡張を起こし、文理解に至ることを、古代から現代に至るまでの豊富な事例の分析を通じ、説得的に主張する。天野氏は、これが認知言語学で用いられる「カテゴリー拡張」とは異なることを、自身のそれと比較することにより述べているが、このような鍵となる用語のその概念自体の検討が、今後、認知言語学の分野での重要なテーマの一つになるのではないだろうか。

（愛知学院大学大学院生）